

なんつつて、その寒風入つちおいだ袋の口ちいつと開げだっけが、

「シューツ」

つと氣持のいいしやつけえ風が流つち来ただど。

「いやいやこれは氣持いいなあ」

なんている内に眠ちまっただど。眠つちやつてまだ暑くなつたのでまだ目覚めだっけが、寒の内に取つといだ袋の風がひとつもねぐなつちまつて、袋。ぺしやんとなつちまっただど。

「あらららら、これ困つたごど、和尚さま来たらおごらつちまあ、何じよすんべ。困つたなあ、何じよすんべなあこの袋の風、何じよしたらいいべなあ」
なんて考えだ。

「あつそうだ、んじやまあ裏の畑さ行つて芋掘つてきて、それ食つて何とがすんべえ」
なんて。